

理事長特別賞（一般部門） 増子 奏多

涙の賞状

僕には大切な宝物があります。幼いころに父を亡くし、母は女手一つで僕を育ててくれました。毎日遅くまで働き、休日には一緒に遊んでくれて、忙しく疲れている筈なのにいつも明るくて、そんな優しい母が大好きでした。

母は1型糖尿病いちがたとうにょうびょうを患っており、僕が10歳のころに母は腎不全じんふぜんになり、透析を受けることになりました。週三回透析に通いながら働き、とても大変だったと思います。それでも母は明るくて「臨床工学技士さんが気さくに話してくれて、とても楽しい。週三回も会うんだから家族みたいだよ」と話してくれました。学校帰りに透析室に寄り、母と一緒に帰宅することもよくあったのですが、母の話通り臨床工学技士さんは気さくな方が多く、僕もよく可愛がってもらっていました。ある日、学校から配られた運動会のお知らせを母に見せました。親子リレーが行われるとのこと、母は「一緒に出て一等になろう」と笑顔で約束をしてく

れました。しかし運動会の一週間前に母は感染症かんせんしょうを起こし入院をしてしまいました。

運動会当日、周りの友達には家族がいて、独りぼちの僕は下ばかり見ていました。すると突然僕の名前を呼ぶ声がきこえてきました。臨床工学技士の方々がスタッフを連れて応援に来てくれたのです。僕は驚きと嬉しきで涙が溢れてきました。親子リレーの時間。臨床工学技士の方が「いくぞ」と僕の腕を引っ張りました。諦めていた親子リレー。事前に学校に許可を取ってくれていたそうです。本当に家族みたいだなと感動し泣きながら走ったのを覚えています。結果は2等でした。後日、母が退院し臨床工学技士の方々が運動会を見ることが出来なかった母のために透析室で運動会の表彰式を開いてくれました。

手作りの賞状をもらい、母と二人で泣いてしまいました。賞状の文字が涙で滲んでしまいましたが、僕の一番の宝物です。

